

## 実践報告

将来の「はたらく生活」を見据えた作業学習の  
在り方について

岡 智亜紀\*

## Work Learning from the View of Students' Working Life in the Future

Chiaki OKA\*

## 【要旨】

本研究では将来の就労生活を見据えて、作業学習において生徒が主体的に作業活動に取り組めるような授業づくりの実践と社会情勢や地域のニーズに対応した作業種の検討を行った。高等部の教育課程で中心的な位置づけにある作業学習の在り方を再考し、改善することが生徒のキャリア発達を促すことに繋がると考えた。授業づくりでは生徒の主体性の向上を目的として、作業内容や目標を明確に示したり、「学び」の意味付け・価値付けを行ったりすることの有効性を検証した。他の特別支援学校の作業学習等の実施状況や特別支援学校卒業生の就職状況を分析・考察して新作業種について検討した。また、佐賀大学教育学部と連携・協働した作業学習を展開するための進め方や工夫について検討を行った。

## 【キーワード】

主体性、新作業種、連携・協働

## 1 研究の目的

特別支援学校高等部では、小・中学部での「学び」の蓄積を、卒業後の「はたらく生活」に移行していく段階である。卒業後の進路は、生徒一人一人の特性やニーズに応じて異なる。特別支援学校高等部学習指導要領の総則において、「自立と社会参加に向けた職業教育」の充実が提示され、特に「高等部の専門教科については社会の変化や時代の進展、近年の障害者就労状況を踏まえ必要な見直しを行う」ことや「職業に関する教科については、現場実習等の体験的な学習を一層重視する」こと等が示されている。昨今では、労働者不足や非正規労働者の増加等の労働課題が挙げられている中、障害があっても企業に就職し戦力として働くことができるような就労支援の強化が進められている。佐賀県においても企業に就職したいと希望する生徒を増やし、その内、内定する生徒数を増加させようとする施策を推進している。その成果もあり、平成28年度は、特別支援学校卒業生146人のうち、42人の生徒が企業（就労継続支援A型を含む）に内定することができた。その理由は、生徒の実態やニーズに合ったコース制の導入や現場実習の推進、教職員の進路支援に関するスキルの向上等が挙げられる。また、「はたらく生活」に最も直結した「作業学習の在り方」を模索することが生徒の就労生活に大きく関係していると感じている。

そこで、本研究では本校高等部の「作業学習の在り方」について研究をすすめ、生徒のキャリア発達を促すような授業づくりを実践するとともに、必要に応じて新たな作業種を立ち上げたり、佐賀大学と連携・協働したりすることを具体化することを目的とする。

\*佐賀大学教育学部附属特別支援学校



習を「なぜ」「何のために」学ぶのか、どんな力を身につけ、それをどう生かすのかを繰り返し学習できるようにした。また、作業学習が単一の指導になるのではなく現場実習や職場見学などの進路にかかわる学習との関連性がもてるように展開した。今年度の職場見学は、縫工部の仕事に比較的近い「株式会社トーアアパレル」を訪問した。(図4)日々の作業学習で学んでいることの関連性が身近に感じられるように事前学習を展開した。学校では手作業で行っている裁断も機械でされていたり、仕事の工程が細分化されていて各自が責任をもって作業をしたりしていることに感心している生徒もいた。質問も事前に考えたもの以外に見学をして感じたことをたくさん質問するなど興味関心の高さが見られた。



図4 職場見学事前指導・職場見学・事後指導の様子

## (2) 新作業種の設定

特別支援学校高等部学習指導要領の総則において、「作業学習とは作業活動を学習活動の中心としながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである」と示されている。生徒の望ましい勤労観・職業観を育むことができるならばどのような作業種を設定してもよい。従前は知的障害のある生徒たちの作業学習は木工や窯業、園芸などの「生産活動」を中心とした作業種であった。それは、製作過程や出来上がりが見て確かめられるので分かりやすく、労働→販売→報酬の関係性を理解しやすいというメリットがある。しかし、近年では雇用状況の変化等に対応した清掃や喫茶、流通などのサービス業を実施する学校も多くなった。知的障害のある生徒は般化が難しく、学校でできていることが現場実習先ではできないというケースがある。作業学習においてはそのギャップをなるべく取り除き、リアリティのある作業活動を設定することも方法のひとつである。平成28年度佐賀県特別支援学校卒業生の企業就職した職種の内訳を調査した。最も多かった職種は病院や介護施設での清掃や洗濯、ベッドメイキング等を行う介護補助業務であった。次いでスーパーマーケットでのバックヤード業務で3番目は流通関連業務であった。第3次産業と呼ばれるサービス作業での就職が大半を占め、今後の雇用情勢からもその割合は増加する見込みである。新しい職域を開拓していくことは障害のある人の職業選択の幅を広げるとともに、自立と社会参加に繋がる。

まずは、佐賀県内の知的障害課程のある特別支援学校に(表1)のような項目でアンケートを実施した。(表1)のとおり、実施方法は異なるが全ての特別支援学校でサービス作業に取り組んでいた。作業の種類については清掃(ビルメンテナンス)が多く、次いで喫茶となっている。この2種目については佐賀県が主催する障害者技能競技大会(アビリンピック)の競技種目に選定されていることからマニュアルがあることが理由として挙げられるようだ。半数以上の学校は軽度知的障害に対応したコースが設置され、サービス作業に取り組んでいるが単元を組んで生徒全員がサービス作業に取り組んでいる学校もあった。また、全ての特別支援学校で作業学習を学校だけで実施するのではなく、地域企業と連携して校外での作業学習に取り組んでいた。その他、現場実習との関連性などについても調査・検証を行い、本校高等部の教育目標や実情に合った来年度のサービス作業実施計画を作成した。



表 1 各特別支援学校の作業学習、就業体験に関する取り組みのアンケート集計結果

各特別支援学校の作業学習、就業体験に関する取り組みのアンケート集計結果					
	A	B	C	D	E
作業班の種類	被服・紙工・窯業・木工・農芸	縫製・紙工・窯業・木工・農耕	縫製・紙工・窯業・木工・農耕	縫製・紙工・木工・農耕・食品調理・レザー加工	紙工・窯業・木工・農耕
サービス作業の作業種	清掃 介護 喫茶サービス (別途取り扱っているが、作業班としては立ち上げしていない。)	＜職業自立コース＞ ①清掃サービス ②福祉サービス ③喫茶サービス ＜職業技能コース＞ 清掃サービス	班としては実施なし 単元？職業コース？	＜普通コース＞ ロジスティック・ビルメンテナンス ＜職業コース＞ ビルメンテナンス・喫茶 配膳業務・ロジスティック 企業内作業学習	ビルメンテナンス 喫茶 その他(校内清掃)
作業班編成	生徒・保護者の希望、生徒の実態を総合して決定している。	生徒から希望をとり、保護者と相談の上、希望用紙を提出。特性や進路ニーズを考慮して学部会で決定している。	生徒の実態、生徒の希望、保護者の希望を一覧にまとめ、学部会で協議・検討している。	生徒の希望、保護者の希望、生徒の実態を考慮し、教師が決定する。	生徒と保護者が話し合って希望作業種を3つ選択させ、職員会議で教師が振り分けを決定する。
作業期間	原則1年で変更。 生徒によっては、3年間同じ作業班に所属することもある。	原則1年で変更。 ※幅を広げることの重要性。	原則1年で変更。 期間は設けず、3年間同じ作業班に所属することもある。	＜普通コース＞1年間、所属して原則3年間で異なる所属班に所属する。 ＜職業コース＞ 1週間のうちでビルメンテナンス・喫茶・配膳業務・ロジスティック・企業内作業学習全てを履修し、2年間続けて行う。	1年間同じ作業班に所属するが、希望及び教育目標で決定するので、3年間同じ作業班に所属することもある。
就業体験	①前期→2週間(2、3年) ②夏季→(3年) ③後期→3週間(1、2、3年) ④冬季→(3年) ⑤特別→(3年)	①前期→3週間(2、3年) *2年生は企業、A型のみ ②夏季→2週間(3年) *企業からの要請があった時 ③後期→3週間(1、2、3年) ④12月→2週間(3年) *委託訓練実施者、未決定者 ⑤1、2月→(3年) *未決定者	①前期→2週間(2、3年) ②夏季→2週間(3年) *企業からの要請があった時 ③後期→4週間(1、2、3年) ④2月→2週間(3年) *企業からの要請があった	・作業学習の部屋の確保。 ・企業側が必要としている作業スキル(物流、スーパー、介護施設)が就労先として多くなってきていると学校での作業種で習得していくスキルのギャップ。 ・現場実習先の確保(生徒数が多くなる中でいかに開拓していくか)。	①前期→3週間(2、3年) ②夏季→1～2週間(3年) ③後期→3週間(1、2、3年) ④冬季→1～2週間(3年)

<p>企業現場における作業学習</p>	<p>①小売業(惣菜作り)→12回 ②清掃→12回 ③介護補助→12回 ④その他作業班毎に年2回程度実施(企業は作業班毎に開拓)</p>	<p>①介護施設(清掃、配膳など) ②旅館(清掃) ③小売業(品出し、青果) ④小売業(品出し) 職業自立コースの生徒が4つのグループに分かれて24回実施する。</p>	<p>①製パン補助→2日 ②加工作業→2日 ③自動車販売店清掃→2日 ④農作業→2日 ⑤野菜の出荷作業→2日 ⑥介護補助→2日 ⑦接客、軽作業→2日</p>	<p>①物流(集品・仕分け)→6回 ②病院(清掃・ベッドメイキング)→4回 ③スーパー(品出し)→3回 ④製パン加工(補助)→3回 ⑤洋服小売店(ハンガーかけなど)→4回 ⑥介護施設(清掃)→4回 ⑦上記から選択→4回 年間28回</p>	<p>①清掃→6回 ②接客・清掃→8回 ③調理・介護→9回 ④品出し→7回</p>
<p>課題</p>	<p>・生徒数の減少により、一作業班の人数が少なくなり、質のいい製品を多く作ることが活動として難しくなっている。生徒のことを考えると、作業班の選択肢が多いことが望ましいが今年度一つ減らしたのが来年度はもう一つ減らすように計画している。 ・進路決定に時間がかかることもあり、実習期間以外で、実習を行うことも増えてきている。</p>	<p>・生徒数が(現85名)さらに増えることが予想される。就業体験先、とりわけ企業開拓を常に行うこと。また、福祉施設での体験については期間を柔軟的に取り扱い、生徒が希望する体験先を提供できるようにする。作業学習を中心としながらも生徒の主体性や望ましい労働・職業観を育むための作業学習について学部で共通理解をしていく必要がある。</p>	<p>・地域に企業が豊富にあるわけではないので、企業の開拓が毎年課題になっている。 ・中学時代に不登校であった生徒の増加とともに、作業学習への参加に配慮を要する状況(場所の設定、細目な休憩等)が増えている。 ・今年度から職業コースを設置した。今までの良い流れを崩さないように配置したことと計画や準備が複雑になり、一部教師の負担が大きくなった。</p>	<p>・作業学習の部屋の確保。 ・企業側が必要としている作業スキル(物流、スーパー、介護施設が就労先として多くなっている)と学校での作業種で習得していくスキルのギャップ。 ・現場実習先の確保(生徒数が多くなる中でいかに開拓していくか)。</p>	<p>・生徒増に伴って、①作業種の数と設置場所の確保、②就業体験期間中の校内外の職員配置が限られた施設設備及び職員数では困難になってきている。 ・作業種が多いことと職員が1/3～1/4が毎年転退職で入れ替わるので、各作業種の経験者を確保することが難しい。 ・生徒増のため、体験先企業の開拓が常に必要になってきた。 ・生徒増のため、体験先福祉事業所の利用人数と利用期間の調整が必要となってきた。</p>

以上のようなアンケートをもとに来年度のサービス作業実施計画を学部にて提案して、協議した。多くの職員はサービス作業の必要性を感じてはいたが、その取り組み方や指導方法が分からず、イメージがもてなかった。そこで、サービス作業を実践的に実施している学校の教諭を講師として招いて職員研修を実施した。研修では作業学習の意義や目的の説明を受け、生徒による実演を行った。(図5) 製品作りしか経験のない職員にとって、「清掃」「福祉」「喫茶」といったサービス作業を見学することはとても新鮮であった。研修後のアンケートでもサービス作業の立ち上げに前向きな意見が多く寄せられた。また、具体的にアイデアを聞くことができたことは実施計画の改善に繋がると考える。今後は実施計画をより具体的に示し、学部教師間の共通理解を図り、必要となる消耗品購入を含めた準備を進めていく必要がある。

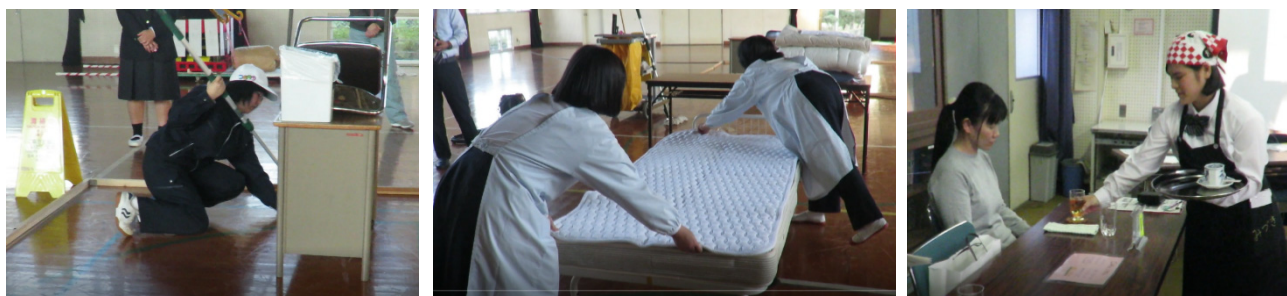


図5 サービス作業についての職員研修

(職員のアンケートより。原文のまま掲載)

1 本日の研修の感想をお書きください。

- ・実演をまじえての研修で話を聞くだけとは違いとてもイメージしやすかった。
- ・幅広く作業種を経験させることでいろんな力を伸ばしてやれると思った。
- ・大変ためになる話を聞かせて頂き参考になった。これまで、物づくりで作業学習を設定する方がいいのでは…とっていて、サービス作業でのイメージが全くなかったが、実演を見て、これでもしっかり作業学習が成り立つと感じた。有意義な時間であった。
- ・初めて、生徒が実際に清掃などをする様子を見せていただきましたが、とても感動しました。世の中の流れに合わせ、作業種を検討していかなければいけないという話はよく聞いていて、本校でも、新しい作業種に取り組んでいかなければいけないとは思っていたが…生徒の姿を見て、強くその必要性を感じた。
- ・実際に新しい作業種をスタートするのは、かなり準備等大変だと思うが、生徒の将来のことを考えると今回見せていただいたような新しい作業種を早目にたちあげなくてはと思った。みんなで協力してやっていけるとよいと思います。いろいろなノウハウをおもちのようなので、今後も講師の先生に助言をいただきながら進めていけるとありがたいと思いました。話だけでなく、生徒に実演してもらいとても勉強になりました。作業学習で日頃から頑張っていることが伝わってきました。講師の先生のお話も分かりやすく、勉強になりました。ありがとうございました。

## 2 来年度のサービス作業の取り組みについてのアイデアをお書きください。

- ・ビルメンテナンスから始めることでよいと思います。
- ・接客サービスも教員の研修を積んで早目にできたらと思います。
- ・ビルメンテを中心に考えていくのがいいのではと思う。一日の作業学習の流れをしっかりと設定することが大切だと思う。
- ・中学部も市立体育館や大学で清掃作業をさせていただいていたが、どちらもころよく受け入れてくださっていたので、学校以外での学習の場も見つかると思います。
- ・生徒の姿を子どもたちにも見せたい気が…。同年代の子どもたちのステキな姿に刺激を受けるところがあると思うので。
- ・資料を見て、サービス作業を行う生徒をわけているのでは？と思います。まずは、働く力が充分についている生徒から取り組ませてみればと考えます。
- ・口頭でもお話ししましたが、外（現場）での活動をのばすために、大学を利用してはと思います。ビルメンテの会場に教育学部の教室を借りたり、喫茶サービスの無料実施を生協で行ったり、ロジスティックを行うための案内物を大学からうけいれてみてはと考えます。

### 現時点での共通理解事項

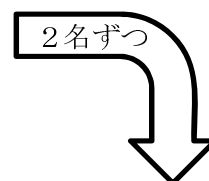
- ・サービス作業の種類については清掃（ビルメンテナンス）から実施する方が進めやすいこと。アビリンピックのマニュアルに則り、①自在ほうき②テーブル拭き③モップ④スクイジー（窓）の練習をしながら校内清掃を行う。喫茶サービスについても状況を見ながら試行する可能性がある。
- ・特定の生徒だけが取り組むものではなく単元を組んで原則、生徒全員が取り組むこと。
- ・各作業班から2名ずつ抜き出し、4つのグループを作る。各グループ、4日間（20時間）を1単元として取り組み、年間を通してローテーションすること。実施開始を5月8日からとして、通常の作業学習と並行して準備を進めること。（表2）

表2 平成30年作業学習実施計画の草案

生徒数・時間割・時数・指導体制等

生徒数	1年生： 8名 2年生： 8名 3年生： 8名 計：24名
時間割	火曜 2・3・4・5・6校時 金曜 2・3・4・5・6校時
週時数	10時間

作業部
木工
農耕
縫工



サービス作業  
6名

### 前期までの指導計画

		2	3	4	5	6	行事予定等	グループ
1	4月10日（火）	×	×	×	○	○		
2	4月13日（金）	○	○	○	×	×		
3	4月17日（火）	○	○	○	×	×		
4	4月20日（金）	○	○	○	○	○		
5	4月24日（火）	○	○	○	○	○		



6	4月27日(金)	○	○	○	○	○		
7	5月 1日(火)	○	○	○	○	○		
8	5月 8日(火)	○	○	○	○	○		A
9	5月11日(金)	×	×	×	○	○		A
10	5月15日(火)	×	×	×	○	○		A
11	5月25日(金)	○	○	○	○	○	保護者作業体験①	A
12	5月29日(火)	○	○	○	○	○	保護者作業体験②	B
13	6月 1日(金)	○	○	○	○	○		B
14	6月 5日(火)	○	○	○	○	○		B
15	6月 8日(金)	○	○	○	○	○		B
16	6月12日(火)	○	○	○	○	○		C
17	6月15日(金)	○	○	○	○	○		C
18	6月19日(火)	○	○	○	○	○		C
19	6月22日(金)	○	○	○	○	○		C
20	7月 3日(火)	○	○	○	○	○		D
21	7月 6日(金)	○	○	○	○	○		D
22	7月10日(火)	○	○	○	○	○		D
23	7月13日(金)	○	○	○	○	○		D
24	7月17日(火)	○	○	○	×	×		A
25	8月31日(金)	○	○	○	○	○		A
26	9月 4日(火)	○	○	○	○	○		A
27	9月 7日(金)	○	○	○	○	○		A
28	9月11日(火)	○	○	○	○	○		B
29	9月14日(金)	○	○	○	○	○		B
30	9月18日(火)	○	○	○	○	○		B
31	9月21日(金)	○	○	○	○	○		B
32	9月28日(金)	○	○	○	○	○		C

6月18日～7月6日まで、現場・校内実習期間によりサービス作業実施なし

### (3) 佐賀大学との連携・協働

校内で身に付けた知識・技能・態度を地域で生かすことで生徒の主体性や自己肯定感の高まりを期待する。具体的には佐賀大学のキャンパス内の清掃業務をさせていただくために大学の担当教授と検討する。10月に佐賀大学の松山教授と検討会を実施した。連携・協働の意義や目的、実施の概要について説明をして松山教授からは以下のような助言をいただいた。

- ・PDC Aサイクルのアクションから始めることも必要である。
- ・社会性を身につけるためのカリキュラムを仕組んでいくこと。そのためには場数を踏んで、経験値を高める必要がある。
- ・教育学部の教室などを清掃したり、生協で作業学習の製品を販売したりするアンテナショップを設置してみても・・・等



## 4 成果と課題

### 成果

#### (1) 授業づくり

- ・ホワイトボードに目標、目標数、出来高、達成・未達成を提示することで目標を意識する生徒が増え、意欲的に作業に取り組む姿が見られた。
- ・仕事の工程や目的、目標を明確に示すことで生徒各自が責任のある仕事を任されているという自覚が芽生えてきた。
- ・作業態度を評価することで生徒が今の学びの姿勢で間違いないという自信を身につけてきた。その自信が自己肯定感の向上を図り、作業活動への主体性に繋がるように継続して指導をしていきたい。
- ・職場見学と日々の作業学習の関連性を強くしたことは学びの意味づけ・価値付けに大きく寄与し、意欲の向上が見られた。また、時間を守ることや報告、言葉遣い、集中、素早さ、丁寧さなど色々な場面で実践する姿が見られた。

#### (2) 新作業種の設定

- ・職員研修で説明を聞いたり、実演を見たりしたことで、指導方法や授業の組み立て方等がイメージできるようになり職員の意識が高まった。
- ・学部職員でサービス作業を新作業に取り入れることのコンセンサスを図れたことは大きな収穫であった。また、来年度の実施計画の大枠についても提案をして、検討できた。

#### (3) 佐賀大学との連携・協働

- ・担当教授の理解と協力を得ることができ、来年度キャンパス内の清掃をさせていただくように進められそうである。また、「生協でのアンテナショップで作業製品を販売してみても」と前向きなアイデアもいただくことができた。日々の作業学習が実社会とどう繋がり、どう生かされるかを体験的に学ぶ機会となると感じた。

### 課題

#### (1) 授業づくり

- ・目標数を達成するために、目標を立てる際、目標数を自分の能力より少なくする生徒がいた。
- ・自己評価が難しかったり、まだ十分に自己肯定感の高まりを感じられなかったりした生徒もいたので、さらに生徒一人一人に応じた手立てや評価の方法を所属職員で検討する必要がある。
- ・決まった場面での挨拶や報告が正しくできるようになった反面、状況に応じて報告や質問ができないこともある。自ら判断してコミュニケーションが取れるように意図的に場面を設定することも必要である。さらに生徒の主体性を高めるために、何のために仕事をするのかという意味や価値を自分なりに考えたり、判断したりできるような指導に努めたい。

#### (2) 新作業種の設定

- ・本校高等部の教育目標や実情、生徒の実態に即した独自の実施計画を学部職員と協議をする必要がある。
- ・今年度は準備段階であるが実践するに当たり、多くの課題が出てくることが予想される。そのケースごとに既存の考えに左右されることなく柔軟な発想で課題解決していくことが求められる。
- ・職員の作業学習に関する知識や技術の向上はもとより、全職員で団結して進めていく土壌を作ってい

きたい。

### (3) 佐賀大学との連携・協働

- ・実現可能な実施計画を提示して、担当教授の助言を受けながら一歩ずつ進めていきたい。更に附属特別支援学校だから実現できるような大学との連携・協働ができないか模索していきたい。

## 5 まとめ

知的障害のある生徒のキャリア教育とは自分の願いや思いの実現に向かって努力できることや「なぜ」「何のために」学ぶのか、仕事をするのかという意味や価値を自分なりに考えたり、判断したりすることだと考える。単に作業スキルの向上を目指す教育ではなく、生徒の将来像を思い描きながら、望ましい勤労観・職業観を着実に身につけていくことが重要である。

特に高等部段階では社会との接続を意識しながら、今どのような教育内容・方法を生徒たちに提供するのかを真摯に検討を進めていく必要がある。さらには作業学習や現場実習、進路指導がそれぞればらばらに存在するのではなく、相互に関連しながら深い学びを作っていく、その結果として卒業後の社会生活や職業生活の中で自分らしく暮らしていく力をつけていくことが肝要である。だからこそ実際の経験や体験を通して自分の適性や将来について考えを深めていくための学習機会の設定が極めて重要だと考える。

就労の願いや希望を胸に社会に巣立っていく生徒が生き生きと働き続けるために、教育内容・方法を再考し、改善することが学校教育に求められている。その責務を感じ、今後も職員や関係機関と連携・協働しながら継続して研究に取り組んでいきたい。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説総則等（高等部）平成21年12月
- 2) 中央教育審議会 今後の学校におけるキャリア教育職業教育の在り方について 2011.
- 3) 全国特別支援学校知的障害教育校長会 知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き実践編 ジーアス教育新社 2013.
- 4) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校著『将来の働く生活を実現する教育』 明治図書 2011.
- 5) 菊地一文 『実践キャリア教育の教科書』学研教育出版 2013.